

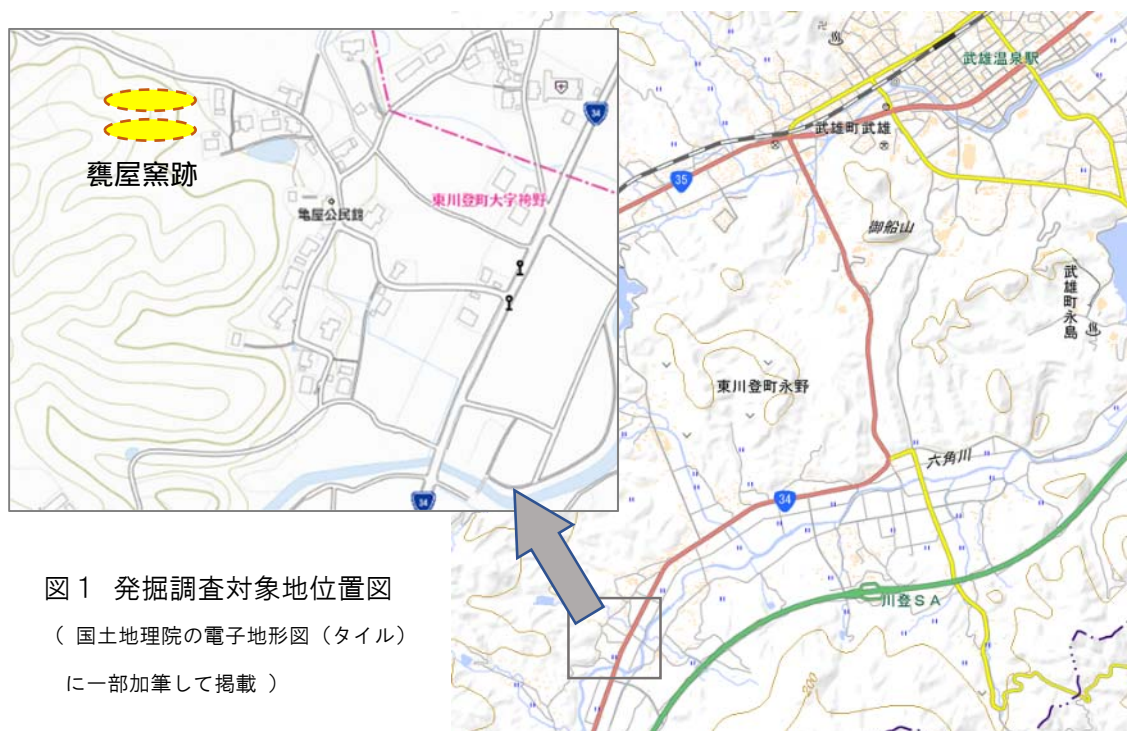
平成28年度埋蔵文化財発掘調査の紹介 【 甕屋窯跡 】

遺跡名：甕屋窯跡（かめやかまあと）
内容・時代：近世陶器窯跡
所在地：武雄市東川登町大字袴野字亀屋
調査期間：2016年4月～8月
調査面積：1,580㎡
事業原因：九州新幹線西九州ルート建設
事業主体：（独）鉄道建設・運輸施設整備支援機構
調査主体：佐賀県教育庁文化財課

〔 遺跡の概要 〕

甕屋窯跡は、六角川が南北に流れる平野部に面した丘陵斜面上に位置し、今回、発掘調査を行った調査区は標高47～50mの範囲にあたります。甕屋窯跡については、甕・播鉢などの遺物やトンバイ（粘土を四角に焼いた耐火レンガ）などが山林の中に散在していたことから、以前よりその存在が知られていましたが、窯の数や大きさ、焼いていた製品の種類、あるいは操業していた年代などは不明でした。

今回の発掘調査では、調査区の北側と中央付近の2ヶ所で登り窯が発見されました。北側のものを1号窯、南側のものを2号窯と呼んでいます。東側の調査区外の残存状況が不明なため登り窯の正確な全長はわかりませんが、西側の山林内に残る部分を測量調査した結果、発掘調査を行った範囲を含め、1号窯が約40m、2号窯が約60mと推定されます。



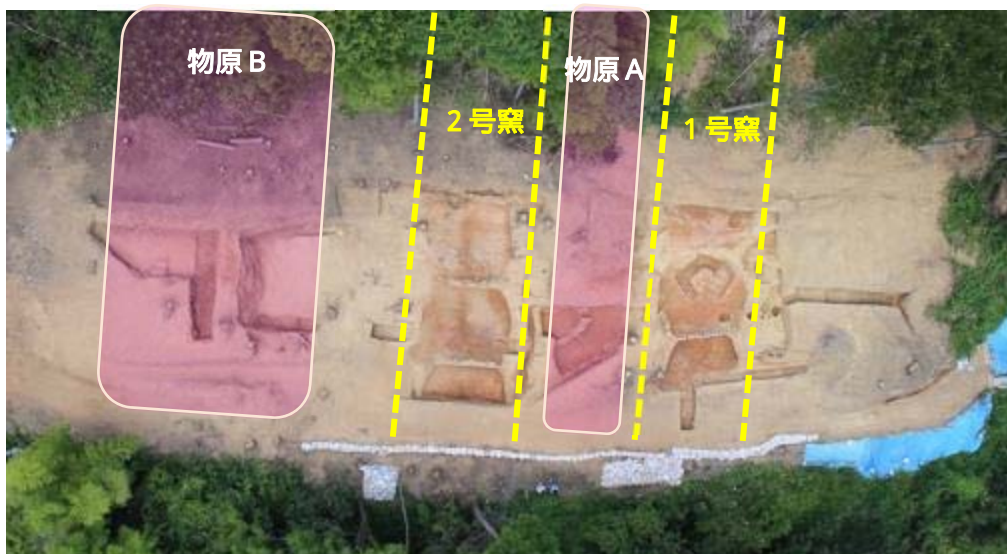


写真1 発掘調査対象地全体写真（右が北）

〔 1号窯 〕

1号窯では、1～3室の3つの焼成室（製品を並べ入れて焼くための部屋）が発見されています。これらは本来、一つ一つが天井を持つ部屋でしたが、天井はもちろん周囲の壁も失われ、床面からわずかに立ち上がった部分が残る状態でした。その中で最も残りのよい3室では、2室との間を隔てる奥壁の幅約3.2m、左右の壁の長さ約2.8mが残存しています。3室奥壁の構築方法をみると、まず地山（地盤）を削って2室と3室の間に段差を設けた上に、大きさ20～30cm程度の砂石を据えて基礎としています。この上にトンバイを並べ、積み上げて奥壁を構築したものと思われるが、発掘調査段階では2段分のトンバイが残っていました。このうち1段目のトンバイはすき間を空けて並べられており、下の部屋から上の部屋へと炎を伝える「温座の巢」という施設になります。



写真2 1号窯3室奥壁「温座の巢」

その他、1号窯の北側約1.5mの位置で、9個体分の甕が据えられた状態で発見されています（SX05）。ここは登り窯に沿って設けられた通路に相当する部分にあたり、中甕5個を接するように並べ置くのに加え、甕の内部に別の甕を入れたり、口を上にして重ねた状態で検出されました。1号窯の廃窯時に通路に置かれ、そのまま埋められたように観察されます。類例は知られていませんが、窯を壊す際の何らかの儀式的なものかもしれません。なお、これらの甕の間から18世紀前半の肥前染付碗が出土していることから、甕が据えられた時期もこの頃と考えられます。

〔 2号窯 〕

2号窯では、焼成室として4室分が確認されています。焼成室の平面形では、1号窯では中央部が膨らむ「胴張り形」をなすのに対し、2号窯はほぼ正方形になる点に違いがみられます。焼成室内部の堆積土を取り除いていったところ、4室の最終床面で大甕がつぶれた状態で発見され、その甕の形状から18世紀後半頃まで生産が続けられたことが明らかになりました。また、床面の様子から、補修を繰り返しながら窯が使われたことがうかがえます。焼成室の床面では、赤く変色した焼土面と青灰色の砂からなる面とが薄く交互に堆積している様子がよく観察できました。この青灰色の砂の上面が製品を焼いた面と推定され、特に2室では5回以上にわたって床面を作り直し、かさ上げしている状況が確認されています。



写真3 1号窯北側 甕出土状況
「SX05」(甕の据置き遺構)



写真4 2号窯検出状況 ※番号は焼成室番号



写真5 2号窯の改修に伴う
焼成室床面の重なり状況



写真6 2号窯4室最終床面に
おける大甕片の出土状況

〔 物原 〕

1号窯と2号窯の間及び2号窯の南側には、窯跡と並行して高さ1～2m余りの高まりが長く続いており、その表面では大量の陶器片、窯道具(製品を窯で焼く際に用いる道具類)

赤く焼けた窯壁(焼成室内部の壁)の破片などがみられ、焼き損じた製品や窯を改修した際の廃材を捨てた「物原(ものはら)」と推定されます。2号窯南側の物原Bは、現状で高さ約2m、幅約15mの規模を持つ小山ですが、掘り下げていったところ、大量の遺物を含む堆積物の下から、谷状の地形となって南側を下る地山の斜面が検出されました。本来2号窯の南側は谷に続く斜面であったところ、失敗品として廃棄された陶器片や、改修に伴う窯壁片や焼土などが繰り返し投げ捨てられ、最終的には逆に小山になるまで厚く堆積していった様子が明らかになりました。



〔出土遺物〕

本発掘調査における出土遺物の大半はこの窯で焼いていた陶器片で、甕・播鉢・壺・瓶・鉢のほか、注口の

ついた瓶・徳利・土管状の不明品などがみられます。これらの多くはいわゆる「雑器」と呼ばれる、日常生活で使用される陶器で、17世紀中ごろから18世紀代までの長い時期幅があります。なかでも甕は出土量の大半を占めます。甕は、粘土を積み上げて形をつくる時、器壁の外側から叩いて成形する「叩き成形」が行われますが、その際、器壁の内側には当て具の跡が残ります。この当て具痕の形状が、肥前地域では17世紀中頃以降、同心円状から格子目状に変わっていきとされていますが、甕屋窯跡出土の甕はほぼ全て格子目文の当て具痕になっています。また播鉢は、1号窯周辺で出土数が多く、2号窯や物原Bでは少量です。播鉢は底部に高台を持たない平底になるものがほとんどで、製品の形状の特徴から、甕屋窯跡では18世紀以降あまり播鉢の製作を行っていないようです。

〔まとめ〕

今回の発掘調査では、2基の窯跡についてその一部を完掘するとともに、物原の調査により多くの製品を発見することができました。そして、この亀屋地区において17世紀の半ばから18世紀後半頃まで、150年近くにわたって陶器の生産を行っていたことが明らかになりました。現在、物原からの多量の出土品を整理中ですが、これらを詳細に調査することで、往時の甕屋窯跡における焼物づくりの実態をより明らかにできるものと思われます。

写真7 物原B 遺物等堆積状況(掘削後)

※写真の範囲はほぼ全て、陶器や窯の廃材などの堆積物で構成されている。写真中の人物の身長は170cm。